

## 近世・近代社会経済資料（古文書）デジタルアーカイブについて

- (1) このデジタルアーカイブは、東京大学経済学図書館が所蔵する近世・近代社会経済資料のうち、古文書類について順次デジタル化をすすめているものです。
- (2) このデジタルアーカイブの利用に際しては「[東京大学経済学図書館電子資料利用規則](#)」に同意したものとみなされます。
- (3) 印刷物など他媒体への使用については、東京大学経済学図書館までお問合せください。
- (4) 画像は白黒です。文書原本の朱書や裏書、端裏書、裏継目印、前欠・中欠・後欠の部分、丁間に挿入された文書や脱落した付箋については、画像内に「朱書」「裏書」「端裏書」「裏継目印」「前欠」「中欠」「後欠」「挿入文書」「脱落付箋」などの置き札を写し込んであります。また、原本が破損し撮影が不可能な場合や、白紙が何枚も続く場合には、「以下破損につき撮影不能」、「以下〇丁白紙につき撮影省略」などのターゲットで明示してあります。
- (5) 画像の撮影には文字が視認できるよう十分な注意を払っていますが、資料の欠損、変色、褪色等の劣化や、ノド部分の状態によっては、原本の文字が全て写っていないものがあります。これらについては資料の原形を保ちつつ、出来る限りの範囲で撮影したものととして了解下さい。写りの悪い文書については、東京大学経済学部資料室にて、所定の手続きにより原本の閲覧をお願いします。
- (6) 文字間のコントラストの差が大きなものについては、視認性を高めるために、照明を調整して複数回撮影しています。この場合は、同一の丁の画像が複数枚連続して表示されます。
- (7) 本アーカイブに関する質問等については、東京大学経済学部資料室までお問い合わせ下さい。
- (8) 本デジタルアーカイブの一部は、独立行政法人日本学術振興会平成 25 年度科学研究費補助金（研究成果公開促進費）課題番号 258061 の交付を受けて作成しています。



經濟學部
新 光 室
5
949

目錄

- 一 百性身持之之書
- 一 捨地授
- 一 經并尼并書心者起法文並通
- 一 同百性身并起作乳
- 一 捨地授初是
- 一 佛藏法條同之通
- 一 出家法法及之事
- 一 返服之用之事
- 一 志者之事



35623

35623







- 一 望賊人害懸條
- 一 日本條言礼通也切更丹
- 一 方之條言礼
- 一 乃中一乃中言制礼
- 一 佛思中言
- 一 乃知作
- 一 上方冥東中代官中佛法方言通
- 一 淨定亦中法方言通
- 一 少言信方條同通

去百姓身持之書  
 戴捨地擬

- 三 卷纏并尻并筆乃起法文通
- 四 同百姓言分取代一礼
- 五 捨地仕候是
- 六 佛高亮條同通

百姓身務覚書

一 儀中法度之思 地代を法し 百姓相を存  
儀中とはよき事なり 只不怠事

一 名を儀中を法者は 地代官之事 之を切存  
年貢を納候 公儀中法度を 百姓皆知事

一 儀中法度 百姓初より 儀中法度  
之は 百姓なり 公儀中用之事を 下りし事あり  
より 不周知 何事も 儀中を 下りし事 之を元法候

一 儀中法度 我々 儀中法度 儀中法度 儀中法度  
又 儀中法度 儀中法度 儀中法度 儀中法度

一 儀中法度 儀中法度 儀中法度 儀中法度  
儀中法度 儀中法度 儀中法度 儀中法度

一 儀中法度 儀中法度 儀中法度 儀中法度  
儀中法度 儀中法度 儀中法度 儀中法度

一 儀中法度 儀中法度 儀中法度 儀中法度  
儀中法度 儀中法度 儀中法度 儀中法度

一 儀中法度 儀中法度 儀中法度 儀中法度  
儀中法度 儀中法度 儀中法度 儀中法度

一 儀中法度 儀中法度 儀中法度 儀中法度  
儀中法度 儀中法度 儀中法度 儀中法度

一 儀中法度 儀中法度 儀中法度 儀中法度  
儀中法度 儀中法度 儀中法度 儀中法度

一 儀中法度 儀中法度 儀中法度 儀中法度  
儀中法度 儀中法度 儀中法度 儀中法度

此類は... 一着種物... 一正月十日... 一二月十日...

乃水を... 一二月十日... 一二月十日...



信を寄すとの事

一何ぞを以て半るに能く抄し給ふに能く半るに能く  
と云ふ事なむと云ふ事の上と云ふ事は及是世に及ぶ心  
部二十の并書の中半馬と云ふ抄を給ふ事なむ  
と云ふ事又田畑ありし事女房と云ふ事能く  
作し給ふ事なむと云ふ事

一男は作をかせき女房はをさるるを縁多るるを世に  
婦たふかせきと云ふ事又女房と云ふ事女房は  
史し事代跡と云ふ事大業をのこす事代跡と云ふ事  
すり女房女房をば離別すし事代跡と云ふ事  
有之能く前巻女房と云ふ事女房と云ふ事は離別

又丹女房と云ふ事又女房をば抄し給ふ事女房をば  
いふ事代跡と云ふ事

一公儀所信度信と云ふ事相背中女房は行儀と云ふ事  
心中よりと云ふ事抱金書生と云ふ事因利と云ふ事  
肖山使と云ふ事半信と云ふ事有之能く  
余所と云ふ事半信と云ふ事は信と云ふ事  
女房又女房の信長と云ふ事信長と云ふ事は信長と云ふ事  
と云ふ事信長と云ふ事は信長と云ふ事  
一百姓と云ふ事衣類と云ふ事有之能く  
信長と云ふ事

一少は廣くと云ふ事と云ふ事は信長と云ふ事は













とぬれ母等々徳をいふにむすぶ者なきとて四女  
あり徳く小吉母教言自、薄くとも中徳地  
傾くともと事あるは信交事

一親母徳く者の心ふくあつてし親よ者のま  
はて身之痛めてたぬれ相又大酒を嘗香  
喉すきや信作身指を能いう一見身の中徳見  
は身を信作才は兄まきいひ半母むつりけき  
親母不収母は信作をさういひ信作は忠恵も  
あつてもも信作も能あまぬ実も多そしお下  
又何程親くよ者ののりまきともひ前を金と  
は難めさる如程身指を能うはゆりよとぬれは

負者く徳をある心もいふた人は空を注  
公儀市法友をもをむき志たりわあらき孫  
入亦と死罪業あるとにあふし山村の親く母よ  
あては何程地交てさういひまき書子見方  
いひまき母も教をわけ信をいひしと徳く母  
をばぬむさ信作はあつぬれ徳も言ひ事  
右のこゝにあつた母もあつたかまきいひ山多上教  
あり兼合雜教をもあつた家をも信作は夜形  
合物以下は信心は信あつた兼合雜教は信作  
ゆりてさる理ぬ地ぬれ友より信多事あつた下  
兼平く市代なれぬあつたあつたを









一 江中見写帳書行之者在該令と宮と中と  
 波右古判仕名を百姓子河と記す事  
 一 波書内少右古判屋浦少宮門少右屋浦波書  
 者之少右古判及波書一外江行川と書す  
 可記す事

一 勘定場同様書場化之令中同浦  
 一 市縄止り打とて中打境中念入場とつとて  
 一本を記す事  
 一 一移傳馬之儀を數を書す事  
 一 小波之儀を記す事

可記す事

一 市持持方之儀格書行之令中一日と記す事  
 一 市縄止り一組戸令中一日と記す事  
 一 市人令中半取有と記す事  
 一 市之少右古判相守事  
 本年早月日

市縄止り記

一 市縄止り中為中間中西波と仕何之通も多事  
 一 市之少右古判相守事



一 所為在大切也存存所後書必少以所感光之  
若者公使方安以所百世業方振也礼也何如之受  
用十万安事

一 一之好也此の者之依信信方安事并言根之  
とくを思ふ十万安也事勿須誰人形も依  
信信方安事

一 一之能之内別家也十万安事

一 一之能之内別家也十万安事  
一 一之能之内別家也十万安事  
一 一之能之内別家也十万安事

一 一之能之内別家也十万安事  
一 一之能之内別家也十万安事

一 一之能之内別家也十万安事  
一 一之能之内別家也十万安事

一 一之能之内別家也十万安事

一 一之能之内別家也十万安事

一 一之能之内別家也十万安事

一 一之能之内別家也十万安事

一 一之能之内別家也十万安事  
一 一之能之内別家也十万安事  
一 一之能之内別家也十万安事  
一 一之能之内別家也十万安事



右之條、於上旨者

安房より奉り候事

起請文、奉書之事

一 今度、御檢地内書内、信作共、先之、不為引、為中  
 万安、山若、若、地、之、早、一、戸上、候、御、地、書  
 此、月、明、細、一、田、細、引、今、引、一、不、為、引、一、  
 一、戸上、候、御、地、書、在、一、引、之、不、為、引、一、  
 奉、書、事、一、一、信、作、候、御、地、書、在、一、引、之、不、為、引、一、  
 一、引、之、不、為、引、一、御、地、書、在、一、引、之、不、為、引、一、  
 一、引、之、不、為、引、一、御、地、書、在、一、引、之、不、為、引、一、

一 今度、御檢地内書内、信作共、先之、不為引、為中

セ、上、中、万、浦、の、致、信、作、一、通、急、及、候、御、地、書、在、一、引、之、不、為、引、一、  
 井、極、深、地、信、今、及、中、引、檢、地、書、在、一、引、之、不、為、引、一、  
 候、御、地、書、在、一、引、之、不、為、引、一、御、地、書、在、一、引、之、不、為、引、一、  
 可、引、一、信、作、候、御、地、書、在、一、引、之、不、為、引、一、  
 未、了、候、事

一 御地書内、信作候、御地書、在、一、引、之、不、為、引、一、  
 中、上、引、及、中、引、一、御、地、書、在、一、引、之、不、為、引、一、  
 御、地、書、在、一、引、之、不、為、引、一、

右之條、於上旨者

奉書より奉り候事

檢地書一紙之事



檢地仕様之覺

一 昔之檢地仕様は西の如く百姓之の上には檢地仕様は  
檢地仕様は只の如く檢地仕様は又檢地仕様は  
乃至後々亦仕様の如く檢地仕様は又檢地仕様は  
七八拾坪も又の如く檢地仕様は又檢地仕様は  
又の如く檢地仕様は又の如く檢地仕様は又の如く  
或は古の如く檢地仕様は又の如く檢地仕様は又の如く  
て且昔の如く檢地仕様は又の如く檢地仕様は又の如く  
又の如く檢地仕様は又の如く檢地仕様は又の如く  
又の如く檢地仕様は又の如く檢地仕様は又の如く

二 昔の如く檢地仕様は又の如く

一 檢地仕様は又の如く檢地仕様は又の如く  
又の如く檢地仕様は又の如く檢地仕様は又の如く  
又の如く檢地仕様は又の如く檢地仕様は又の如く

一 昔の如く檢地仕様は又の如く檢地仕様は又の如く  
又の如く檢地仕様は又の如く檢地仕様は又の如く  
又の如く檢地仕様は又の如く檢地仕様は又の如く  
又の如く檢地仕様は又の如く檢地仕様は又の如く  
又の如く檢地仕様は又の如く檢地仕様は又の如く  
又の如く檢地仕様は又の如く檢地仕様は又の如く  
又の如く檢地仕様は又の如く檢地仕様は又の如く  
又の如く檢地仕様は又の如く檢地仕様は又の如く  
又の如く檢地仕様は又の如く檢地仕様は又の如く  
又の如く檢地仕様は又の如く檢地仕様は又の如く





徳をいふは可考新書面也

一徳を并ひの如く徳と又用ひし時と深田淺田と云ふ  
るは徳らみら申すは徳は打極有る

一山田増入揚中前又比州之島支田相士等々入極少  
後より并しと申すは山田支也之切落る打しは徳人  
共しくは也

一田相士申極く申すは其支之等々入極少部一にて  
也之方及遠るるに申すは其支之等々入極少部一にて  
心之等々申すは申すは其支之等々入極少部一にて  
下は相士揚中より申すは其支之等々入極少部一にて  
を元徳等々申すは其支之等々入極少部一にて

徳入極少部一にて

一田相士より申すは其支之等々入極少部一にて  
其支之等々申すは其支之等々入極少部一にて

一徳をいふは可考新書面也  
徳は打極有る

一申すは其支之等々入極少部一にて  
其支之等々申すは其支之等々入極少部一にて  
其支之等々申すは其支之等々入極少部一にて  
其支之等々申すは其支之等々入極少部一にて







是則中拙下之是又縁の事

一捨地中初之目井の帳有依長文の事  
書之肉之業中上中下之捨田細之業を  
言を凡之自切地を略之れ自切地の上は  
以之て心定も忘其上毎之帳に重の上は  
不切地の上は細の時上書時之百性  
匠面及迷惑又之通不足田細上中下之  
迷惑ある所の井の上は之の信帳あり  
初之入金を以て之帳と之相違河上中下  
之之村中百性を存家之信帳を百性  
台談合右取失遠之遠之百性

長遠一亦も之逐金後上戸小自然信如百性  
之相違有之と中中書之百性  
之の事年之之分書中改遠目之  
帳百性不切地之帳信立帳あり之  
之の遠目之百性迷惑江繩打元之  
新帳中相之信帳あり之帳存行  
百性永代迷惑江繩打元之  
大切之儀一自前右之考之  
右之信之捨地之肉金求心小之け若事  
之油所信肝

要也

沖流儀の儀目

光

一 跡之度度の中流儀通納事ありぬるこれなりて定極  
之を入る相納事

一 納儀沖流儀入の時方は大納事一有在沖流儀并代  
小揚迄念を入る上流好色なりり儀を足るしし儀  
なりて之より好色並を少ぬる沖流儀より横込上は子り  
年三出つき一戸米之米何流恵交ぬり儀毎一系代念

儀事

一 考々昔上京下世君とは年々望山方小上之内を目  
やとの昔の御重中の自然下世君を致しは年納の時坐  
儀入字并世儀水の時も又計中時も儀ありやあり

一 考々沖流儀入儀之内度小揚子礼拍言世志徳當り  
又礼拍ふ世志とて為交當山此の百毎小揚心寄流儀  
如き礼拍ふは急度とて入るに下流事

一 納儀沖流儀入の内中為交為儀とてりり忘元戸米  
切の納とて見事 為交可ぬ年定流と納一死事

一 当世之年分の代官并子代母取の拾出を山山方世之  
徳并を沖流儀を方分納重水入場と並しり此  
之為納并を付是流山流を方分納重為交と為交  
是流と上流之可事

一 沖流儀と定事并上世又月一定事不納流可下流儀  
如き考も十月度天氣よりは是は子初より内又交



降上は木月茂成日茂子納一丸首素とをを日月と  
也といふ又地いきん移り上かも南と云うは通るテ  
年立之移百性之陸惑化儀と云天乳如河の相自  
十首女自も有限子相分相吸毛も成程悟入高の  
て此納の百性承と改運又と云中成之りクも所  
考と云事

一 仰義一戸末切の納年何子儀又何祀也と書甘立念  
法義院并多代判形仕之者より甘立念之并掛の  
内何程也、亦同テ兼何程と中掛を留懐又何書付  
立念山仰義院并多代判形仕也と云事  
一 尊納の何程之内念を入改掃除少成何書事と云事

信申

一 仰義より仰義の末座の念を入一書山并末を換  
也、念のより末座部一り納出之の云々、兼多も法  
義のり、末座と云と云事

甘立念の事、少も物色たるとは下末下末志あり  
七、年より云々、此甘立なり、云々、万念を入事

一 小上と云人教と云、云々、何何納年、兼有と云、云々、  
而中何何何と云人思仕人、甘立、兼末、宛、何、何、  
小上、云、何、何、何、何、人思、云、何、何、又、何、何、  
茂、何、何、何、何、何、何、何、何、何、何、何、何、何、何、





一 市城女中 方送物来之儀 兩市卷之月三之相成事  
一 市卷指之内 小上之志 亦指女中之取童之六指  
幼色一切信之也

一 他儀有之 是百儀有七亦宛之積他貨百夜茶の  
小上之志の女一也之事

一 市卷の初年 入貨百儀有九亦宛 亦同前之事  
一出之貨之百儀有七亦宛 亦儀之事

一 小上儀 亦指帳を附小上之志 亦七百夜也 利者及之  
亦也

一 百夜茶の儀 亦儀有定之外種之親縁を戸掛百姓  
迷惑儀相之は 實際之と小上之儀有及之儀

可為越度 毎月陰儀下之儀

一 小上之儀 亦指之儀 亦指之儀 亦指之儀 亦指之儀  
亦指之儀 亦指之儀 亦指之儀 亦指之儀

一 亦指之儀 亦指之儀 亦指之儀 亦指之儀 亦指之儀  
亦指之儀 亦指之儀 亦指之儀 亦指之儀

一 亦指之儀 亦指之儀 亦指之儀 亦指之儀 亦指之儀  
亦指之儀 亦指之儀 亦指之儀 亦指之儀

一 亦指之儀 亦指之儀 亦指之儀 亦指之儀 亦指之儀  
亦指之儀 亦指之儀 亦指之儀 亦指之儀

一 亦指之儀 亦指之儀 亦指之儀 亦指之儀 亦指之儀  
亦指之儀 亦指之儀 亦指之儀 亦指之儀





一 幸内取波中佛初年所抄方之儀の二年三月庚子  
勘定云相違沖勘定云沖帳云々云々

一 納米并波方之儀于月物少以上三月廿令尚書云  
元政名列を至る事

一 内卷納米並波方之儀の事海ノ内所産米少少  
計上は年賦の事等抄に記あり波仕振り云々  
佛説氣沖同分氣云々大并所ノ百世之縁  
子有為何云々抄に記あり波勘定云々  
依ノ方日業云々又云々後

右之條々末々之儀抄に記あり相違云々也  
西保三年戊  
源在志

日益兄  
順亦  
紀伴

淺草方

佛城米方

佛説在見中

佛月分氣中

佛説第作法ノ儀云々

一 西佛説并波方之儀の事海ノ内所産米少少  
計上は年賦の事等抄に記あり波仕振り云々  
佛説氣沖同分氣云々大并所ノ百世之縁  
子有為何云々抄に記あり波勘定云々  
依ノ方日業云々又云々後

渡市勘定下り地を字下格上り下り年々高直物より  
存年々安直を油賤に由りて由る氣に由るに由るに  
仕向向場代に新由氣元より金銀久安直を由り勘  
定所へ一高得下り事

一納年水止之日は月番より佛為荒下り高直地より  
下り年々上場并番付亦不達海格高直より下り  
下り地は昔より自然信作具顯有るより可常に入  
るるに一高得下り事

昔より氣物を後高直より下りたり高直をより一高得下り事  
此より高直をより下りたり一高得下り事

但月番より由る荒直若くは由る高直地は昔より不達意中

俄下りより由る地は昔より時々月番より由る地は昔より  
由るより由る月番より由る地は昔より由る地

一納年水止之日納り代上家付より下り年々高直に同  
なるより格をより下候上格物を後高直に由るに由る  
儀を存より下り并出に由るより下り儀を由るに由るに  
下りより由る儀をより下りより下り儀を由るに由るに  
下りより由る儀をより下りより下り儀を由るに由るに

一納年格を入号懸を足し時格並を由る儀に入て  
中より下りより下りより下りより下りより下りより下り  
納り下りより下りより下りより下りより下りより下り  
中より格入り可格中

一 納米也儀之儀も人之内納るる月儀之時は西元  
の内納るる月儀も人之内納るる月儀も人之内納るる月儀も  
事一に之を納るる月儀も人之内納るる月儀も人之内納るる月儀も  
一 納米也儀之儀も人之内納るる月儀も人之内納るる月儀も  
内納るる月儀も人之内納るる月儀も人之内納るる月儀も  
一 納米也儀之儀も人之内納るる月儀も人之内納るる月儀も  
内納るる月儀も人之内納るる月儀も人之内納るる月儀も

一 納米也儀之儀も人之内納るる月儀も人之内納るる月儀も  
内納るる月儀も人之内納るる月儀も人之内納るる月儀も  
一 納米也儀之儀も人之内納るる月儀も人之内納るる月儀も  
内納るる月儀も人之内納るる月儀も人之内納るる月儀も

一 納米也儀之儀も人之内納るる月儀も人之内納るる月儀も  
内納るる月儀も人之内納るる月儀も人之内納るる月儀も  
一 納米也儀之儀も人之内納るる月儀も人之内納るる月儀も  
内納るる月儀も人之内納るる月儀も人之内納るる月儀も

一 納米也儀之儀も人之内納るる月儀も人之内納るる月儀も  
内納るる月儀も人之内納るる月儀も人之内納るる月儀も

一 納米也儀之儀も人之内納るる月儀も人之内納るる月儀も  
内納るる月儀も人之内納るる月儀も人之内納るる月儀も

一 納米也儀之儀も人之内納るる月儀も人之内納るる月儀も  
内納るる月儀も人之内納るる月儀も人之内納るる月儀も

一 納米也儀之儀も人之内納るる月儀も人之内納るる月儀も  
内納るる月儀も人之内納るる月儀も人之内納るる月儀も

一 納米也儀之儀も人之内納るる月儀も人之内納るる月儀も  
内納るる月儀も人之内納るる月儀も人之内納るる月儀も

一 納米也儀之儀も人之内納るる月儀も人之内納るる月儀も  
内納るる月儀も人之内納るる月儀も人之内納るる月儀も





むし少初を儀有之はさし一宗を改め儀並に  
後此に又入清の并山上等宗を以て儀を切さ  
中此に又入清の并山上等宗を以て儀を切さ

右儀を切さしより儀を以てし山と云ふは  
右儀を以てし山と云ふは  
右儀を以てし山と云ふは  
右儀を以てし山と云ふは

一 佛苑宗儀は向は勿儀之角敷念之入算抄山  
之儀敷由之合出丹之及列勿傷而為疎儀掛  
附之之庭地之并前庭納之河之之宗之之  
儀敷由之合之改之之

一 佛苑宗儀は向は勿儀之角敷念之入算抄山  
之儀敷由之合出丹之及列勿傷而為疎儀掛  
附之之庭地之并前庭納之河之之宗之之  
儀敷由之合之改之之

差別小宗格の事

一 佛系宗廟の時と禘と祭との法及び建地由の事

此年節同儀も二宮格の御由有御事

一 先代宗廟格の御由ありし月十七日

之言に御定之御格の御由ありし月

遠くに御定之御由ありし月

御定之御由ありし月

常々御由ありし月

一 上方の御由ありし月

御由ありし月

御由ありし月

又法不建地由の御由ありし月

一 毎年為る御由ありし月

御由ありし月

御由ありし月

御由ありし月

御由ありし月

御由ありし月

御由ありし月

一 佛系宗廟格の御由ありし月

御由ありし月

御由ありし月

失字左極子自代小河けり之のたより今も  
一跡とい納金百俵者之儀或は宛切り或は投てき  
十枚宛納金は是より多る官有之由分宛納三枚後  
但し是より少くは限り多水卜新事

一寛永十九年<sup>二年</sup>深之成辛初又当辰辛山花百事  
信信之儀修目書通相御山右修目切之清之由  
代山山郎之能く若中史寸方日之後之和家山  
杉子抽每所花山仍法然公領所為花然切之由  
水多らあり水取花山多る存御年細山官極も  
吉存之由万の西河子多る分御為氣山自氣  
重花山多山心之為情も万人之損失難之衆

三存後所奉公之辛慈悲山右山名御元之場  
之はは之より成又ハ辛方苦方勝之儀之之夫  
之儀を少くし月守て之入念候事

承應元辰極月

打裁次郎  
曾根源金  
伴丹花人

沸藏奉門亮  
沸月身之亮



- 一 武家諸法度之事
- 二 進服之用之事
- 三 忠考之事
- 四 能衣服之用之事
- 五 縮布小立中間法度之事
- 六 徒着當意衣類之事
- 七 急外布之事
- 八 居色徒侍之事
- 九 御氣之事
- 十 刀服指長居法度之事
- 十一 御軍服之事

- 十二 御投物方務之事
- 十三 御新衣之事
- 十四 御法儀所之事
- 十五 御縮細布布縮力大御定之事
- 十六 御老中御方之事
- 十七 御着當意御方之事
- 十八 京都御所中御自之事
- 十九 同殺御所御自之事

武家諸法度

一文武弓馬之道專可相習事

一大名小名在江戶交際之儀每年可相定內儀致奉勤從者之負教誨不可及繁多以其相應可減少之但公役者任教令可隨分限更

一新儀城擲營堅禁止之居城之段壘不廢不敗壞之時者違奉所下受其自也檣城門亦不規可修補事

一於江戶并何國張何等之事雖有之在國之事守其不可相待下知事

一雖於何不行刑罰設有之外不可出但任檢

使之尤右事

一企新儀緒徒黨成扣言初之儀制禁之事

一諸國主并領主等不可致私之諍論平日須加謹慎若有可及遲滯之儀違奉所下受之有辜

一國之職之在方名近習并物取私之結婚付去公家於結婚色ハ勿違奉所下受之有辜

一高代賜答據察之儀或或深察或察宅答也亦深可為勞界之凡百事可勿緩約事

一衣裳之品不可混亂但後公卿堂白小袖付去檢束表練之儀ハ勿違奉所下受之有辜

一宗輿之門之懸國之職之在方名堂白小袖

懶之得侍從之婦子幸平以上武醫階之者為病人  
免之甚凡禁遊項但免科之車者有別也至于法家中  
名書其國摺其人可載之事

一本曰之障者之者齊相抱者有致逆殺害人之者之是  
勿消之務之或之或之可遊之事

一陪長質人所執之志之及逃放死刑內之逆者仍不可  
更其有若於此而所有雜道係之折獄之者甚多相可

言上事

一知行不務清慮沙法之必及收法至都亦下合表解事

一道路驛馬舟梁等之制絕之令收役是之停滯事

一私之關不制之清而制禁之事

一古者於之私停止之但荷船之制外之事

一諸國之散在手社領自古至今所附本之而後之教の

一邪教宗門之俄國之可之休學可禁止之事

一石者之軍於五之可之役是科事

一萬事應江戶之法度於國之所之可遵仍之事

右之修之准當家先制之自今度潤也之定之記并  
相守者也

寛文二年卯六月廿日

追服有用之事 附上之 仁徳之

殉死名古之可儀之益之事なりといふ一書より





本員至之畫不用捨也下 並 振筆下之候かろく地  
傷札碎し 亦あふふ自かたはら事

一 善信之禮儀大刀百代 黄金を投武銀拾枚多限志  
たういひけりて 概少く 武銀を投 善洞之旨也 礼物定  
事 是下月之并 山袖十半若可 概少く 雖為事 是  
て之 禮色いひ 積一 角を之 國將大 右之 礼儀 於  
川一 の有も けり 善 繁 録 録 寸 包 亦 亦 亦 亦 亦 亦  
等 是 下 善 概 少 事

一行死業者有之 阿之 役人之 介 一切 其 場 入 出 之 集 事  
一 喧嘩 口 論 與 割 禁 之 若 之 之 阿 令 存 場 上 其 答 之 事 於  
下 人 修 傳 口 論 之 割 一 切 之 池 集 事

一 於 場 中 並 喧 嘩 口 論 之 事 其 相 善 年 一 計 之 様 也  
善 分 之 善 集 善 之 事 一 序 之 上 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦  
之 一 善 集 善 之 事

一 此 事 若 令 亦 亦 之 役 人 亦 亦 亦 之 善 之 介 之 善 集 但  
役 人 拾 圓 之 事 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦

一 亦 之 之 内 之 事 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦  
は 善 乃 下 之 事 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦  
辨 之 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦  
之 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦  
復 之 下 之 事 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦

一 於 法 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦











伊予守古川市務人

天保二年七月十八日

市軍役之市

一少名 人教亦六人

一少名 人教亦六人

一少名 人教亦七人

一少名 人教亦九人

市役二名  
市役三名  
市役四名  
市役五名  
市役六名  
市役七名  
市役八名  
市役九名

一少名 人教亦五人

一少名 人教亦六人

一少名 人教亦五人

一少名 人教亦七人

一少名 人教亦九人

市役二名  
市役三名  
市役四名  
市役五名  
市役六名  
市役七名  
市役八名  
市役九名

一 九百石

杖口拾五入

一 八〇石

弓 五張  
湯籠 拾張

湯籠 拾張

一 七〇石

弓 上二張  
湯籠 拾張

湯籠 三張

一 六〇石

弓 上二張  
湯籠 拾張

湯籠 二張

一 五〇石

弓 上二張  
湯籠 拾張

湯籠 二張

一 四〇石

弓 上二張  
湯籠 拾張

湯籠 二張

一 三〇石

弓 上二張  
湯籠 拾張

湯籠 二張

一 二〇石

弓 上二張  
湯籠 拾張

湯籠 二張

一 一〇石

弓 上二張  
湯籠 拾張

湯籠 二張

一 五石

弓 上二張  
湯籠 拾張

湯籠 二張

一 五石

弓 上二張  
湯籠 拾張

湯籠 二張

一 三万石

三上三松六松  
うす大  
湯施百石丁

池五松中  
のあり松

一 四万石

三上四松六松  
うす中  
湯施百石丁

池七松中  
のあり松

一 五万石

三上五松六松  
うす中  
湯施百石丁

池八松中  
のあり松

一 六万石

三上六松六松  
うす中  
湯施百石丁

池九松中  
のあり松

一 七万石

三上七松六松  
うす中  
湯施百石丁

池百石中  
のあり松

一 八万石

三上八松六松  
うす中  
湯施百石丁

池百石中  
のあり松

一 九万石

三上九松六松  
うす中  
湯施百石丁

池百石中  
のあり松

一 拾万石

三上拾松六松  
うす中  
湯施百石丁

池百石中  
のあり松

右之故實永十百二月十七日社 仁

御持打方様 寛永三長年御上洛より

一 五拾石

五人

一七拾石

六人

一 百石

七人

一廿百石

十人 百石花也

一 廿五拾石

十人

一五拾石

十人

一 三万石

十三人

一四拾石

十四人





一 六千石	九千人	一 七千石	百五十人
一 七千石	百五十人	一 八千石	百五十人
一 八千石	百五十人	一 九千石	百五十人
一 九千石	百五十人	一 一萬石	百五十人

是乃拾万石迄五万石。百半人増

一 御陣扶持二百石。十人。九百石迄。一万人。一 石拾万石迄。三人。

一 江戸也。御陣。一 石拾万石迄。一 石拾万石迄。一 石拾万石迄。一 石拾万石迄。一 石拾万石迄。

一 自前部より有之下。御陣。一 石拾万石迄。一 石拾万石迄。一 石拾万石迄。一 石拾万石迄。一 石拾万石迄。

一 江戸廻り。御陣。一 石拾万石迄。一 石拾万石迄。一 石拾万石迄。一 石拾万石迄。一 石拾万石迄。

一 關東。御陣。一 石拾万石迄。一 石拾万石迄。一 石拾万石迄。一 石拾万石迄。一 石拾万石迄。

新田浦より復定之是

一 五万石	又拾万石
一 六万石	又拾万石
一 七万石	又拾万石
一 八万石	又拾万石
一 九万石	又拾万石
一 一十萬石	又拾万石

- 一 女子名在八頁在七
- 一 七頁在八頁在七
- 一 三頁在方在七在七
- 一 百石
- 一 內從名在七
- 一 妻姓
- 一 從同心

宣和承十九年十月朔日

- 一 森石四万
- 一 以松石之松石
- 一 以松石之松石
- 一 松石之松石
- 一 松石之松石
- 一 松石之松石
- 一 松石之松石
- 一 松石之松石

清園之景

- 一 上方、箱根 今切

- 一 櫻海、
- 一 甲列、
- 一 信列、
- 一 越後、
- 一 加須、
- 一 中仙道、
- 一 羊標、
- 一 栗上列、
- 一 佐佐木、
- 一 貞列、
- 一 常陸、
- 一 下流

- 根寄川
- 小佛
- 碓氷
- 碓氷
- 碓氷
- 碓氷
- 碓氷
- 大戸
- 芝
- 口江
- 房後
- 岡宿
- 大料
- 川俣
- 中田
- 奥川
- 喜松
- 機ノ京

- 一 上院 常陸
- 一 下院 常陸
- 一 常陸
- 一 常陸
- 一 常陸

定

一 酒池之... 大工の... 文... 喜...  
 一 布... 大工の... 喜...  
 一 右... 喜...  
 一 左... 喜...

一 東... 秋... 喜...  
 一 國... 喜...  
 一 寛文... 七月... 十三日

仰老中要記之分

- 一 禁中... 公家朋跡
- 一 國持... 公家朋跡
- 一 大造... 公家朋跡
- 一 知行... 公家朋跡
- 一 一宮... 公家朋跡
- 一 大御... 公家朋跡



一所在行  
 一佛鏡在行  
 一佛如定行  
 一在國在行  
 一佛鷹方  
 右是通以佛老中佛更就也

善佛年忘流以文就

一聖書流書行  
 一新序書行  
 一佛納戶行  
 一百人德行  
 一佛小性德書行  
 一佛小性行  
 一佛真行  
 一佛納戶行

一佛目有流  
 一老有以流宛臥  
 一佛修以流  
 一西九至流門流  
 一佛形多流  
 一佛門山書流  
 一九子石山下交替年之書合  
 一佛言法有以流  
 一佛修  
 一佛書如子以  
 一佛題以  
 一佛使書行  
 一火消使人  
 一佛中人德書行  
 一佛納戶行  
 一二九以書年書行  
 一道年以流  
 一佛者  
 一佛五以  
 一佛是年以



志忘らぬと一考利個又利是之事と相對乃也  
亦亦處上と亦小下也之與也之亦也若望如費  
而小於亦也と御屋之考重料事

一諸證文判初之事

右證文及對文或判或自判書上といふ他人悦  
計判を以て其可也此不審新立流披自之條京  
都番位之町人之及云傳包之とて一と云先町人亦  
判亦見知可也事

一執賣物半扱及留事

右尚時より一重と云事及右端時若流文亦右  
形亦といふも亦分明新改定書向後而時代所を

手度流文亦の流事一有之と慥一札一也事

一大事亦事

右大事亦事之雨亦向大事之流亦水之亦事  
亦亦流獨也亦一及亦名次亦事之亦亦町人  
亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦  
亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦

一出事之亦人之流事

右件之輩以亦重之堅沛法及之存之執若  
亦計有亦流亦亦亦之亦亦亦亦亦亦亦亦亦  
亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦

一之亦事之亦徒停止之事





一 一夜之宿りしと云々 終つて宿はあつたし 并宿屋のりした  
まき月切ぬと信す 月すも俄に宿をさるる事ありし方  
一 戸来きことあの一ヶ月も自然他所宿か入る家来  
之宿を先とす所はひて戸ありし

一 職をとりし所をさるる事存す 宿あつたの裏に又住家が  
まきは所中とて可なり 宿屋の住望人より宿か  
ゆを他所の宿へあつた宿へゆるといふ宿をさるる宿を  
さるる事ありし所中申す事ありし事ありし

一 子石宿の宿り及先此其親奉り下りし事ありし事あり  
あつた宿をさるる宿へゆるといふ宿をさるる宿を  
一 京中すしとの所よりさるる宿へゆるといふ宿をさるる宿を

停止す 自ら宿屋に入るといふ宿をさるる宿を  
右より宿屋の中へ宿をさるる宿を

元和八年戌霜月十二日

一 所人大腸指す 宿屋の宿をさるる宿をさるる宿を  
中へ宿をさるる宿をさるる宿をさるる宿を  
宿屋の宿をさるる宿をさるる宿をさるる宿を

一 宿屋の宿をさるる宿をさるる宿をさるる宿を  
宿屋の宿をさるる宿をさるる宿をさるる宿を  
宿屋の宿をさるる宿をさるる宿をさるる宿を

一 此卷之七則人臣副官を以て在るに當りて是事  
一 僅儀又法より官房之長に禮を祈りて家を行く  
自今以後欠房之長に於て是事あり

一 宿所一少事一宿所一人一宿所一人一宿所一人  
右宿所不事并宿所成亭之儀亦不立一宿所一人  
上も儀を以ては是事あり宿所一人宿所一人宿所一人

右之方與可中節をも也  
寛永六年十月十八日

是の未だ是の儀は後身  
條々

一 後先世の儀は二十三年未だ先世の儀を以て守りて制  
法事

右條々之儀元和六年以来之儀事之儀中其儀有之儀事  
制之儀事之儀事之儀事之儀事之儀事之儀事之儀事  
以上之儀事之儀事之儀事之儀事之儀事之儀事之儀事

一二日觸之儀事

右每月宿所中其儀事之儀事之儀事之儀事之儀事  
但下之儀事之儀事之儀事之儀事之儀事之儀事之儀事  
面之儀事之儀事之儀事之儀事之儀事之儀事之儀事  
ありあり之儀事之儀事之儀事之儀事之儀事之儀事  
用を以て妨利後目之儀事之儀事之儀事之儀事之儀事

自今以後自修之法法を予亦更一切の守法令を也  
一跡或乎終法之限迄物配方亦之事

右其乃堅固の内可中幸甚并之入組よ其の禮文のせ  
而一し但子不儀之族於之は重き中り也及未  
期道理よ守たると遺言相立り家と也並又後家た  
るゝ家敷建治之事法親人類雖有之とて之を  
与利師極と号す心出家中令祠堂入賢親  
重幸且心人端之法例其経教之及理よ守り  
自之以後為後家之と堅固の中一門并同儀が守定  
而し不犯の能雖有之進之禮文許容すべし  
一養子并入督中之事

右遺物配方亦之事準之條之父母堅固の中法事  
相立禮文之承並及末期令忘却之刻りし下も亦  
用之即肯たると云之ましき事

一禮加終文法有之儀も存知中探又中りし之儀控  
之儀新又禮物法て之實之共謀之蘇心之例中  
右世前之輩皆是路之傷者人之新儀罪科付置  
若世為人之誠其んを之か次凌犯之者も或は死罪  
或は籠舎可儀罪科之極重也

一將吏たのり一而給揚負又の取過少法該職員求與  
令制禁之也右宿仕事の別而之守科事  
右付後別紙書を不違之教令之執得は仕務實之者





右條之京中可令宿和也  
明誓之奉未霜月廿百

京師所々々奉可守定能狀

一所々奉之奉也 年奉或若常老病或病  
必法之々々々有之九月之也 中々は却々所宿是難  
成務多相定々奉之定所也 宿老を定至  
定奉令願也 毎月之於金前法事以休也  
之文書令事よせ振也 酒宴ホ長し 宿之要月を  
成務急利後之々々事 古來之秩曲事 方今  
自之後奉也 有之儀 年奉所中 九 自之儀也 法を  
相々 一 伏一同 可守法令之者也 也

町々奉之奉也 毎月之儀 宿老之儀 宿老之儀 宿老之儀  
書之仕 書 毎月之奉令之場 宿老所中 宿老之儀 宿老之儀  
宿老之儀

宿老狀

一 宿老出之儀 毎月之宿老出之儀 宿老出之儀 宿老出之儀  
中 宿老出之儀 宿老出之儀 宿老出之儀 宿老出之儀  
下 宿老出之儀 宿老出之儀 宿老出之儀 宿老出之儀  
法を 宿老出之儀 宿老出之儀 宿老出之儀 宿老出之儀  
宿老出之儀 宿老出之儀 宿老出之儀 宿老出之儀

一 親縁之差別并祀儀属僊未之如先儀作具其具之  
在次所中如之也根先相臨仕多初事  
一 所中事合之月之早う菓子之介張也正合停止其禁酒  
下法事

右之儀之岩塚月沖法儀仍出解

京都所之家之并儀金之... 兼是又毎月言合... 借金等... 沖法儀

沖法儀

一 將拜在... 之儀... 儀有之... 一之三初... 如大神妙... 中今内... 十之...

之儀... 儀有之... 一之三初... 如大神妙... 中今内... 十之...

明舊二年丙申二月日

- 一 野山論所目海上儀表書文言之事
- 二 同起法文
- 三 同百姓幕方以假死
- 四 沖鎮指承亨島之事
- 五 寬文十戌年法代官病歿 任制不降自
- 六 延寶三年法代指至而苦山所觸
- 七 盜賊人穿襲之條々

舟山論所目海上儀表書文言之事

一 表書之通目也指上中下各方立合而法守之者也  
 以形云河海亦在是月分之上也神終歸一極在日此  
 以天必指系浮定也一極之若通之系極也一表也  
 右之通今日修定而一極相淡而後表系相定也  
 明曆二年甲申九月朔

起法文書

一 武藏國河那何者之野年山空事水湯境傷之候  
 以浮定也水也初作中今有法目之系也表方之表  
 相言河去上端城之場不山川在境同治之通也

遠方一及遠處乃方遠處之嘉年。此判取也。其  
信以親解作勿傷信思信最乃方只信信信  
右之信之相相有也  
梵天或目之通

月日

何國何村

何國何村

此此

此此

佛事仍亦

若上下一札之事

一今方何村何村之公事。公事境所信所捨便以  
此信實變之。上公事。其付何方より。つた。其信事  
一信思信所乃乃乃乃乃。一信若只信乃乃信也  
此知之。方之信事。一信信事  
一信思信所信事。乃乃乃乃乃。信思信也。若  
若若若乃乃乃乃乃。信思信也。若若若若若  
右之信之相相有也。此知之。方之信事。一信信事  
若若乃乃乃乃乃。

明曆四年戊辰四月十日



中何指 亦多事

一處

一自名

一鴻

一厚

一聘之於

一臺灣

一白海

一瘡

一水札

一極首難

一川島

一鴉

一西產

右之公山信交之信之公山信相守是之信之公山信

廿 上月廿六日

光

一沛代官官平切之月色提川除亦商以之平切之  
永莫川成不足之分之中之中以能任之代家亦多

之之月也者以之也提川除亦商以之平切之  
之但官中自地不足之分之中之中以能任之代家亦多  
一沛代官官平切之月色提川除亦商以之平切之  
一沛代官官平切之月色提川除亦商以之平切之  
比心之也皆原事

一沛代官官平切之月色提川除亦商以之平切之  
之人亦究其而書記之也任之亦其法役入用也又  
則他書我亦在也皆原事  
一沛代官官平切之月色提川除亦商以之平切之  
分別有仕之者每及後之沛流有之不亦亦細又  
則他書我亦在也皆原事

一 冲藏入中之所人下惟信也成信元并新創縁也成不  
して後也信受他人之信物以以肝黄信了儀も  
可考停止并代自分より一利田相開教信受也  
勿得包漏等も大に爲一儀一考之用事

一 江戸近由之冲蔵入下も万事江戸中も江金水合  
以成信元成同事も多中も初之帳能相撲也  
信受類之見也也也爲重法人邪集下江も可  
成世用事

一 之親之水帳世終久帳以通本信之南儀也且利卷  
終成水不持信帳之也成水帳之也利也也

相違奪地仕水帳法之重一考事

一 沖信元と以成定元利親縁者養子末仕可事

戊正月十日

是

一 去年閏之洪水分と法民若困窮之可也卯辛上去年  
季も又も種代考重し相射法も石考之條も手親  
可抱之也也

延寶三卯辛二月日

盜賊人穿襲條



此事一途人捕すよれば是は陸路之入用者性不  
得達感と稱し一室下之事

甘如家以外并ひ人々を信託なき様多食食性金貨  
之類を任ふと目類も了る事故書并長ん叙多并  
族々又世経る之を能く承之の以て皆至之能之の是又和  
之て動之事

一 旅を可く者蓋よあひゆえり之を地以代官と運  
一 戸ありおれを地以代官一戸穿鑿若自分より  
穿鑿を執り事一戸を以て其子細之計之自然地  
以代官を穿鑿して後於若事一書紙度事  
一 堂子事由林より内中不審也と称する事一書紙度事

一 土亦之を相誘之上地以代官とて後之と人の身新  
時と度を下て中用之を在平途人をあつた性を入  
りやと入し自然親也対と相慕者若下り之  
搦捕若之の一すの一於各處の後を以て大  
て考此事す

一 山中筋けりるが跡物ゆへ之下は各別其外故事  
下し跡物下すかは自然親也之道之跡物を  
亦跡物を下すかは之の跡も之一戸あり跡跡  
考同類之種をゆりしと種界より之跡地  
お別しと穿鑿之より之の跡事  
一 亦下りて望人有之る屋中を有限の書物とて



門庭より廿三日と考然亦を亦のありし有り神  
之及しも字次送也于任事之を又人徳に懃可  
天留事

廿三日又人考く一と云々實一物其分と云事

一望人之鏡物之如て居るは子連考之文継之合  
考考を仕皆を乃人し後考林と云陸中事と云津  
略考全連考一と望人於此考考と云之文継可  
考曲事支

右考之沖候私領寺社御元考考可考考考考  
之文継毎年正月十考を限け茲考考考考之私  
度中考考考考考考考考考考考考考考考考考

地代代官一考考考考考考

明曆二年申十月

- 一 日中格言札五道
- 二 方々格言札
- 三 道中卒六名制札
- 四 沖思平之字
- 又 下知林
- 六 上方閑束内官の内法度寺式通
- 七 評定内法度寺式通
- 八 小書信方條目抄通

是

- 一 沖格言并終業之格物是終可為格物自他曰於  
 妻同分重格物之稱之付初是之除之格物  
 中取入し着除方條の中革ありは格物の中  
 其上由は格物之取引之馬を格物の中  
 一人是之格物一人は其費用を格物し之れは格物  
 格物は格物之斷之主分は格物自他除之格物  
 上格物は格物之格物
- 一 江戸京川之格物之法有格物文格物有りて今格物  
 格物文格物、格物文格物、格物文格物、格物文格物、  
 格物文格物、格物文格物、格物文格物、格物文格物、  
 格物文格物、格物文格物、格物文格物、格物文格物、













一 不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>家<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>新<sup>レ</sup>百<sup>レ</sup>文<sup>レ</sup>家<sup>レ</sup>下<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>事

一 市<sup>レ</sup>傳<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>法<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>貨<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>所<sup>レ</sup>也<sup>レ</sup>子<sup>レ</sup>在<sup>レ</sup>於<sup>レ</sup>身<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>出<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>但<sup>レ</sup>於<sup>レ</sup>貨<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>

入<sup>レ</sup>於<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>所<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>貨<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>所<sup>レ</sup>也<sup>レ</sup>子<sup>レ</sup>在<sup>レ</sup>於<sup>レ</sup>身<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>出<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>但<sup>レ</sup>於<sup>レ</sup>貨<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>

一 仕<sup>レ</sup>是<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>所<sup>レ</sup>也<sup>レ</sup>子<sup>レ</sup>在<sup>レ</sup>於<sup>レ</sup>身<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>出<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>但<sup>レ</sup>於<sup>レ</sup>貨<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>

一 掛<sup>レ</sup>又<sup>レ</sup>掛<sup>レ</sup>是<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>所<sup>レ</sup>也<sup>レ</sup>子<sup>レ</sup>在<sup>レ</sup>於<sup>レ</sup>身<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>出<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>但<sup>レ</sup>於<sup>レ</sup>貨<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>

右<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>所<sup>レ</sup>也<sup>レ</sup>子<sup>レ</sup>在<sup>レ</sup>於<sup>レ</sup>身<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>出<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>但<sup>レ</sup>於<sup>レ</sup>貨<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>

萬<sup>レ</sup>曆<sup>レ</sup>元<sup>レ</sup>年<sup>レ</sup>庚<sup>レ</sup>子<sup>レ</sup>月<sup>レ</sup>日

奉<sup>レ</sup>行

神<sup>レ</sup>皇<sup>レ</sup>御<sup>レ</sup>曆<sup>レ</sup>元<sup>レ</sup>年<sup>レ</sup>庚<sup>レ</sup>子<sup>レ</sup>月<sup>レ</sup>日

一 萬<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>法<sup>レ</sup>後<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>執<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>下<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>事

一 喧<sup>レ</sup>喧<sup>レ</sup>口<sup>レ</sup>端<sup>レ</sup>口<sup>レ</sup>端<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>花<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>道<sup>レ</sup>也<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>事

一 荷<sup>レ</sup>擔<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>事

一 竹<sup>レ</sup>木<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>事

一 武<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>事

一 家<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>事

一 之<sup>レ</sup>後<sup>レ</sup>相<sup>レ</sup>法<sup>レ</sup>以<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>

右<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>相<sup>レ</sup>身<sup>レ</sup>計<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>者<sup>レ</sup>也

辛<sup>レ</sup>子<sup>レ</sup>月<sup>レ</sup>日

上<sup>レ</sup>使<sup>レ</sup>中

下<sup>レ</sup>知<sup>レ</sup>作

條<sup>レ</sup>

一 今<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>事



送事

一 禮儀之儀位元氣借身成於之類之了事

一 傳物之可出此文事

一 年負事之可并換事

一 未之方之了事不發之地之了事

上本國之了事之他日之了事

付漢代之了事之了事之了事

右之了事之了事

辛卯月日

野馬  
孝後  
作是

上使中

光

一 以某分度之了事 任者法法度之了事

一 津界之了事可為了事

一 中代官之了事 任者力事 入金大切之了事

一 本之了事之了事 任者了事 任者了事

一 方度之了事 任者了事 任者了事

一 為西之了事 任者了事 任者了事

一 洞之了事 任者了事 任者了事

一 境井堀川除之儀 每年正月十日 當信十日 月損之了事

水之町に里振り及び傷水に因り損壊之地を以て  
為場入念可事付之事

一 市代屋より租借物并詰商賣品等之事

一 市代屋より他之用之事

防新田を以て其の場所より勘定を判りて可事

一 市代屋より知れりて之を以て排り可事

一 周東方より納之申上り入る儀并其外宛口銭之承

百文付之宛宛上方分と云々在り并宛口銭之承

取事

一 市代屋より納付金目録より残目録を以て可事

之を以て之を以て可事

一 市代屋より入念事目録より可事

一 市代屋より人馬入付の用之品を以て納付之事

一 結法度より相付物より毎年より組改可事

一 市代屋より宗門之儀并座中納の通出可事

之を以て人乞食等々を以て成念を入改可事

一 市代屋より納付金目録より入念事

階級を相勘りて之を以て納付金目録より可事

多量に之を以て入念可事

一 市代屋より納付金目録より百姓より納付金目録より可事

小百姓より納付金目録より納付金目録より可事

目録より納付金目録より納付金目録より可事

一 心中言諸役入用之儀五百世之合小帳之他如判在及  
 二 由其帳之関目之由代押切市判仕重言更之以下  
 一 所代官所中言事之可志能之實數及所少儀之勿  
 論之官中付之若儀若難仕儀之禮文控按以可也  
 方奉行所口指越之十事

一 市代事并所造言主并若入用之儀以金儀入意之  
 付事

右之儀之可言之度之政相酌比江并申入意仕是也  
 一 市代之若於申申之可也及者也

寛永外十五年申正月日

曾根保光  
板浦内亮

伴丹頓  
酒井和泉守

上方

国东

市代安元  
市代安元

是

一 此每年之正月十日不提除由言法入意之官并事  
 一 段付功亦也 終付之由申案自之由法度事之執之相月  
 一 報常之由申則一市付之由每年在之由申國分也  
 一 以申之由面之由言之由申之由申一市事奉達 上之儀

和由大切と好仕重と一併事

一 市城米計の由村 信守の如く其の年廿之儀梅巻  
を入し頼之堅一戸有由元中同信元 信守年々

吟有之若忍米を納くも忠度市代官元々  
二 之旨由新 俵中引之百浦之

附沖勘定本由初之十月分照二月迄  
一 市山三月迄一も年々悪政故市元  
之万七分て相又事

一 每年三月の市勘定始也去年之分  
皆麻也若可分故皆麻市勘定始也  
政之上市勘定市子細市人  
去年之分て相又事

一 市代官元々之所要若一市後昧  
私欲を止宿居振業を不  
物毎順路但此を独之付勝之  
職を怯捨之極也此川除也  
心御元上事

一 市代官元々之能仕重と中  
仕方損場いれと一  
百姓此形神亦能成連  
立少振之持を細  
其地少時も有之十  
其地少時も有之十









限於五條之條が了り事

一 所人親或之事 命令 内文能取即 七上可之 事家

一 妻到 并古佛 在信通 余之 七上可之 事近 考日 敢

を 務る 候 宜し 可也 或 命令 或 命令 之 料 事

一 有 候 可也 相 考 也

宿 水 十九 正月 廿 日

頼 次 守 大 領 氏

一 所 人 親 或 之 事 命 令

一 二人 之 事 命 令 下 七 子 形 事 七 上 可 之 事 也

及 未 期 第 目 七 上 可 之 事 七 上 可 之 事

一 主人 之家 僕 之 事 命 令 七 上 可 之 事 七 上 可 之 事 七 上 可 之 事

一 親 子 間 之 事 命 令 七 上 可 之 事 七 上 可 之 事 七 上 可 之 事

一 家 僕 之 事 命 令 七 上 可 之 事 七 上 可 之 事 七 上 可 之 事 七 上 可 之 事

一 目 録 之 事 命 令 七 上 可 之 事 七 上 可 之 事 七 上 可 之 事 七 上 可 之 事

一 所 人 之 事 命 令 七 上 可 之 事 七 上 可 之 事 七 上 可 之 事 七 上 可 之 事



中歴家系下下之事

一 田畑等の未墾を新入之事 中歴家系下下之事

一 或は飛越或は科下種科恒重之事

一 恒重混文載移之事 恒重を中歴家系下下之事 恒重之事

或は為合或は之科 移合之事 恒重之事 恒重之事

科之恒重之事

一 代官下給人方所人恒重之事 恒重之事

人代官并給人方之恒重之事 恒重之事

恒重之事 恒重之事 恒重之事

恒重之事 恒重之事

一 國為之恒重之事 恒重之事

下為恒重之事

一 寺社領之事 恒重之事

恒重之事 恒重之事

恒重之事 恒重之事

一 寺方の恒重之事 恒重之事

恒重之事 恒重之事

恒重之事

一 中歴家系下下之事 恒重之事

恒重之事

一 教養人之恒重之事 恒重之事

一 恒重之事 恒重之事



捨て置くべしと云事

一 御杖及藪者之杖本は信教寺下より引取らるる御杖  
信之殿より御杖預湯より引取らるる御杖本より引取らるる御杖  
相傳へ上は信教寺之杖と云事

一 皮若鴨者之外種より又引取らるる御杖本より引取らるる御杖  
本は杖本之杖本と云事

一 枳身查福より引取らるる御杖本より引取らるる御杖本  
九より引取らるる御杖本より引取らるる御杖本  
御杖本より引取らるる御杖本より引取らるる御杖本  
御杖本より引取らるる御杖本より引取らるる御杖本

心持より同云事

一 河原より引取らるる御杖本より引取らるる御杖本  
御杖本より引取らるる御杖本より引取らるる御杖本  
御杖本より引取らるる御杖本より引取らるる御杖本

一 弟好し物之儀は信教寺より引取らるる御杖本より引取らるる御杖本  
上より引取らるる御杖本より引取らるる御杖本より引取らるる御杖本

一 信教寺より引取らるる御杖本より引取らるる御杖本  
御杖本より引取らるる御杖本より引取らるる御杖本  
御杖本より引取らるる御杖本より引取らるる御杖本  
御杖本より引取らるる御杖本より引取らるる御杖本

其相應之しん能くす乃吟時事

一 壁に書法之儀并一壁下地と蕭相成ありしむきひひと  
去りきり有テ並儀下好し志くしテきり下り中好り  
段又上ぬりをも仿れ下地之儀より早儀得し錯乞  
儀下以存之通と云故に今存預より可儀能く云又  
念年

一 法又礼部し儀概と仿概とに別と云云  
と儀何事と云云成程委細同語之半有也と云何月  
何の儀方し云云と云何中中初至留日能く為字相  
又ハ元之自限つらと云定入礼部ありし後入礼部  
ハ何儀人の時鏡概を於中礼と云云云云云云云云

仕上り上人の中宮殿と云云云入礼部者夫中合礼と云  
分儀一書印書に書中書礼之儀にけしと云書中書礼と云  
信に云れし抄ありと書中と云云云云云云云云云云  
人を教中儀部と云云云云云云云云云云云云

一 抄本は凡壁其の何と云書中書礼又と云賜と云云云云  
と云云自人は種つらと云書中と云云云云云云云云  
御書中自人は種つらと云種絶と云書中と云云云云  
七十自云と云書中書中書中と云云云云云云云云  
何書中と云云云云云云云云云云云云云云云云  
是以下書中と云云云云云云云云云云云云云云  
一人是と云云云云云云云云云云云云云云云云





少料しと能く入念下り分り所分既申上二以好  
 本教如教達之し心快分至余分下りし事  
 一可入分全非是隣多人分志心之貴如多又志不  
 余分今全非是隣多人分志心之貴如多又志不  
 云し一方同心代之志能く下りし事  
 存厚之常之常之入信分林下りし事

寛文元七年六月

修

一 小堂修了後後又之利起し造修了万事貴之志也序  
 兼和之し心之し若越也我々分有古長長修和定

以是取後了御法之上修修若修也分相之し志也

一 小堂修了後後又之利起し造修了万事貴之志也序

竹中御伴法殿外切之志心修了時修修了万事

一 小堂修了後後又之利起し造修了万事貴之志也序  
 諸和人は有教以下修了之御法也

一 御修了若凡相決置鏡行し外法修了言法上中下  
 一 考考之考考了り分若左修修修了也上中下入志  
 考考之考考也

一 小堂修了後後又之利起し造修了万事貴之志也序  
 考考之考考也









